

会員の広場



向学心について

加藤 博光（東京）

経済倶楽部80周年おめでとうございます。今後とも末永いご発展を心より祈念いたします。講演会では、講師の方の講演内容の広さと深さに感嘆し、この倶楽部の上質さと歴史の重さを感じ、いつも楽しみにしております。また、会員もどなたが講師として演壇に立つても不思議ではないほどで、友人の紹介で気軽に入会した私は、恥ずかしくたいへん恐縮しております。さて、経済倶楽部の起源となった80年前といえは、

私の祖父の時代にあたると思います。その昭和初期、金解禁で国論を二分した政府の経済政策をめぐって、民間の知識人が論陣を張り、各所で講演会が活発に催され、かつ多数の聴衆を集め盛況であったとのことで日本人の問題意識の高さ、またその問題を解決しようとする勤勉さに驚くばかりです。

勤勉な向学心といえは、明治生まれの祖父から聞いた話では、薩長土肥でもない伊豆の片田舎でも、農村の働く青年を対象とする夜学が盛んに行われ、尋常小学校を卒業して働きに出た多くのお百姓の子息が、労働を終わった夜に勉強に通っていたそうです。祖父も完璧な「水のみ百姓」（小作人）の倅ですから、読み書き・そろばんの基礎を小学校で習った後は、本人の向学心のみが勉強意欲の支えだったと言っていました。その夜学では、孔子の論語よりも頼山陽の『日本外史』に興味を持ったようです。『日本外史』といえは、幕末の頃の尊皇攘夷派のバイブルでベストセラーの歴

史書です。難しい漢文で、これを教材にして、授業についていけない明治人の向学心はずいごと正直思いました。夜学の先生は、寺の和尚と地主の隠居と聞きまですので、『日本外史』の講読は、明治維新を支えた上級農民が先生だったのでしょう。所謂、草莽そうぼうの臣といった人々だったことがわかります。

この人々は、徳川300年の平和の中で準備された知識層で、明治期の貧農層を切り捨てることなく教育の場を純民間で用意し、それに立身出世を夢見る向学心あふれる若者が応えた図式です。こうした土壌があったから、封建制度から解放された明治の驚異的な近代化を推し進めるパワーになったと思います。まったく同じことが、第2次世界大戦後の戦後復興でも発揮されるわけですから、勤勉な向学心は本源的に備わった日本人の資質のような気がします。

立身出世の最終目標も博士か大臣かで、世のため人のためという日本的な帰結なのがうれしくなります。

「昇官発財」（官僚として出世し財をなす、の意味だそうです）の中国人とは明らかに違うゴールです。ただし、現在のグローバル競争ではおカネ儲けが勝敗を決しますので、中国人的なほうが有利なようですが、日本人が悩んでいるところかもしれません。

現在は自ら迷い込んだ感のある閉塞感の中に、大震災と原発事故が発生し未曾有の国難といわれますが、これも国民の叡智と努力で乗り越えるものと確信しています。それには、この向学心というすばらしい資質を次代に引き継がねばいけません。その意味で、年齢には関係なく勉学に励む経済倶楽部の諸先輩にも勇気づけられております。私はここで60歳の定年退職を迎えました。アイススケートで言えばコンパルソリーは終わって、これから自由演技だという気分です。会社員生活から解放されて、自由な発想が許されるなか、貪欲な知識欲をもって、会員の皆様と思考する空間を共有できればと思っております。